

爺ヶ岳から岩小屋沢岳における ライチョウ *Lagopus mutus* の生息状況

堀田昌伸¹・宮野典夫²・尾関雅章¹

2007年の繁殖期に、後立山連峰の南端にあたる爺ヶ岳主稜線と岩小屋沢岳周辺でライチョウの生息状況調査を実施し、爺ヶ岳主稜線で8つ、岩小屋沢岳周辺で2つのなわばりを確認した。これらのなわばり数は過去の調査結果と同程度のものではあった。

キーワード：ライチョウ, *Lagopus mutus*, 爺ヶ岳, 岩小屋沢岳

1. はじめに

ライチョウ *Lagopus mutus japonicus* は本州中部の高山帯にのみ生息し、1980年代までの調査で生息個体数は3,000羽ほどと推定されている¹⁾。近年、南アルプス北部などの山域では、生息個体数が著しく減少したことが知られている²⁾。一方、ライチョウの生息個体数や繁殖状況が長期モニタリングされている立山の調査から生息個体数はかなり年変動することも知られている^{3)・4)}。そのため、ある地域のライチョウの生息状況を適切に把握するためには、ある程度長期的なモニタリングが必要と考えられる。

爺ヶ岳主稜線域のライチョウの生息数やなわばりに関する調査研究については、大町山岳博物館ほかにより1961年及び1963年⁵⁾、1980年⁶⁾、1992年⁷⁾、1996年⁸⁾、2002年⁹⁾、2006年(中村 未発表)の6回実施されている。一方、爺ヶ岳の南西にある岩小屋沢岳周辺については、1980年と2006年(中村 未発表)の2回調査されただけである。そこで、2007年の繁殖期に爺ヶ岳及び岩小屋沢岳周辺のライチョウの生息状況を把握した。

2. 調査地と方法

調査地は後立山連峰の南端である、新越山荘から岩小屋沢岳、種池山荘、爺ヶ岳北峰までの主稜線を中心とした標高2,400m以上の高山帯である(図1)。

ライチョウのなわばり維持期・抱卵期にあたる6月29日～30日と育雛期にあたる7月24日～25

日に、調査地の登山道を中心にライチョウの生息環境をくまなく踏査しライチョウやその痕跡の発見に努めた。ただし、6月29日は悪天候のため、ライチョウの生息調査はおこなわなかった。

なわばり維持期の6月30日には、ある地域になわばり雄がいるかどうか、発見した雄がなわばり所有者であるかどうかを確認するために、ライチョウ雄の鳴き声をテープレコーダーで流し、その反応をみた。テープの声に反応して、近づいてきた場合や鳴き声を発した場合には、なわばり雄と判断した。

発見したライチョウについては、発見した場所や時間、個体数、性、年齢、行動、環境などについて記録した。また、ライチョウの糞や羽毛、砂浴び跡についても、発見した場所や時間などを記録した。特に、抱卵期間中の雌の大きな糞(以下、抱卵糞)は必ず記録した。これらの調査結果をもとに、この地域におけるライチョウのなわばり数、なわばり雄の配偶関係、繁殖成功などを求めた。そして、これまでの調査結果との比較から、この地域におけるライチョウの現状について考察した。

3. 結果および考察

6月30日及び7月24～25日のにおけるライチョウの個体及び痕跡の調査から種池山荘から爺ヶ岳北峰にかけての爺ヶ岳主稜線には8つ(J1～J8)、岩小屋沢岳には2つ(I1, I2)のなわばりがあることを確認した(表1, 図2)。ただし、今回の調査では爺ヶ岳北峰以北については天候悪化のために十分な調査ができなかった。また、砂浴び跡等の分布から、南

1 長野県環境保全研究所 自然環境部 〒381-0075 長野市北郷 2054-120

2 大町山岳博物館 〒398-0002 大町市大町 8056-1

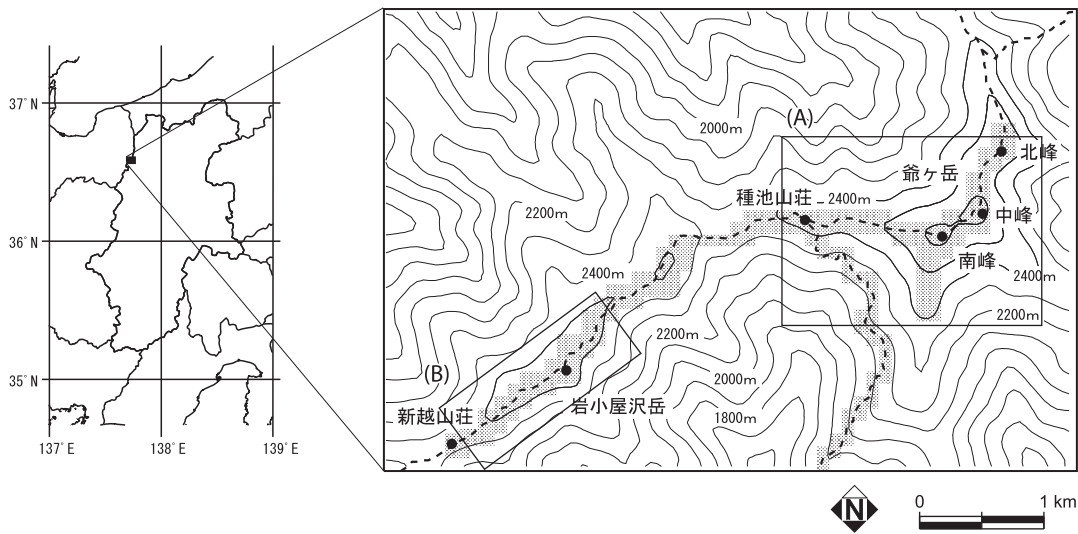


図1 調査地
メッシュ部分がライチョウの生息状況を調査した範囲。破線は登山道を示す。

表1 爺ヶ岳・岩小屋沢岳におけるライチョウの個体や痕跡の確認状況

| 山域 | なわばり No. ¹⁾ | なわばり維持期・抱卵期 | | 育雛期 | |
|-------------------|------------------------|------------------|------------------|----------|------------------|
| | | 6月30日 | | 7月24～25日 | |
| | | 個体 ²⁾ | 痕跡 ³⁾ | 個体 | 痕跡 ³⁾ |
| 爺ヶ岳 主稜線 (A) | J1 | | 抱卵糞 | 雌1ヒナ4 | |
| | J2 | 雄1(a) | | | |
| | J3 | 雄1(a)雌1 | | | |
| | J4 | 雄1(c) | | | 抱卵糞 |
| | J5 | 雄1(b, c) | | | |
| | J6 | 雄1(b) | | | |
| | J7 | 雄1(b) | 砂浴び跡 | | 砂浴び跡 |
| | J8 | 雄の鳴き声 | | | 抱卵糞, 卵殻, 砂浴び跡 |
| 岩小屋沢岳 (B) | I1 | 雄1 | 抱卵糞, 砂浴び跡 | | 砂浴び跡 |
| | I2 | 雄1 | | 雄の鳴き声 | 砂浴び跡 |

- 1) なわばりは、6月30日と7月24～25日に確認した個体及び痕跡から確定した。なわばり No. は図2のなわばり No. と対応する。
- 2) ()内のアルファベットが同じ雄は同時に確認したことを示す。
- 3) 痕跡のうち、抱卵糞（雌が抱卵期にする糞のこと）は雄のなわばりに抱卵中の雌がいる指標となる。

峰南尾根のなわばり (J8) の南に別の雄がなわばりをもっている可能性が残された。

確認された10のなわばりのうち、雌の確認や抱卵糞から、少なくとも5つのなわばり (J1, J2, J3, J4, J8, I1) には雌がいたと考えられた。しかし、それ以外のなわばりについては不明であった。

繁殖の正否については、7月25日にJ1のなわばり内で孵化後約2週間のヒナ4羽を連れた雌1羽を確認した。なわばりJ8で捕食された卵殻2個を発見した。また、なわばりJ3については、6月30日に登山道脇で休息中の雌雄を確認した際、抱卵中の雌に特有の行動（短い採餌時間に啄み続ける）¹⁰⁾

が見られなかったことから、このつがいは何らかの原因で、すでにこの時点で繁殖に失敗した可能性が高い。しかし、それ以外のなわばりについては不明であった。その後、自動撮影により岩小屋沢岳周辺 (I1) と爺ヶ岳南峰 (J4) でヒナ連れの雌が撮影された¹¹⁾。このことも考慮すると、すくなくとも3つのなわばり (J1, J4, I1) では繁殖に成功したと考えられた。

爺ヶ岳主稜線については、これまでに6回調査がおこなわれている。今回の調査と同じ範囲で確認されたなわばりの数は、8 (1961 & 1963)⁵⁾, 11 (1980)⁶⁾, 9 (1992)⁷⁾, 7 (1996)⁸⁾, 9 (2002)⁹⁾, 7 (2006)

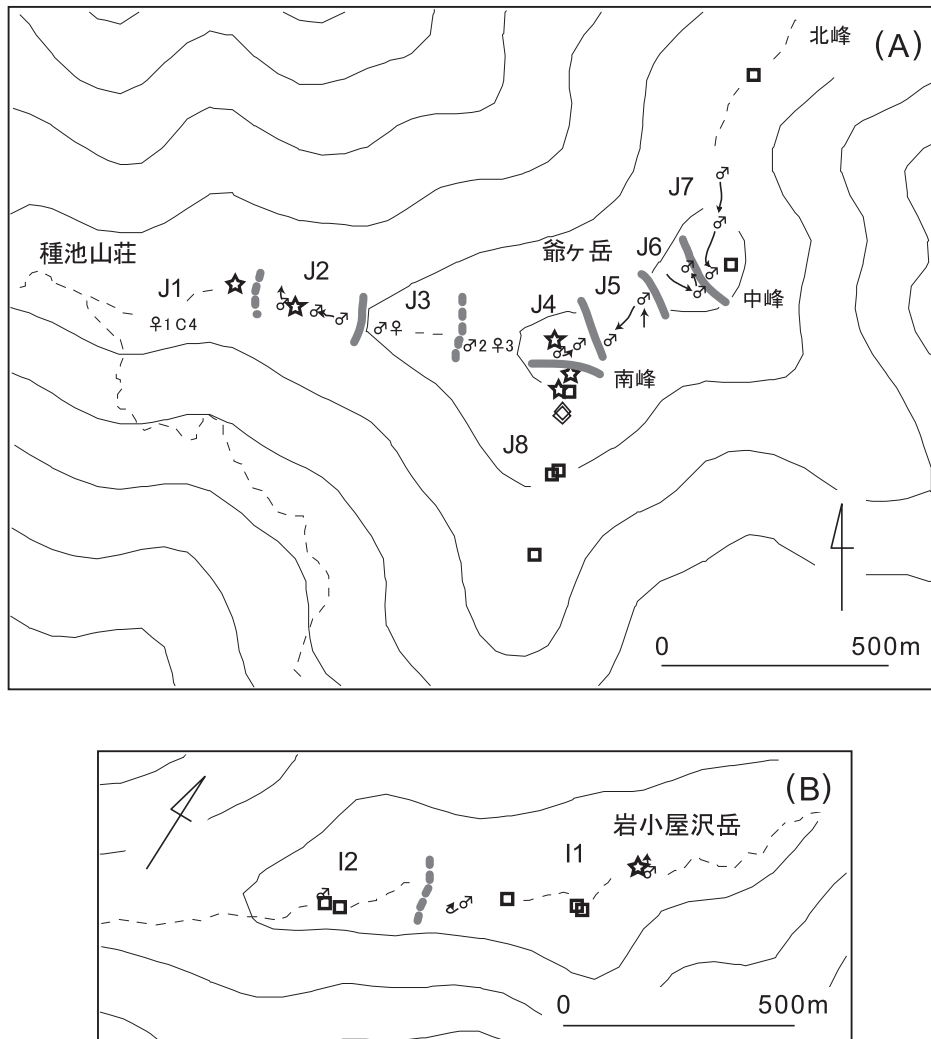


図2 爺ヶ岳主稜線 (A) と岩小屋沢岳周辺 (B) で確認されたライチョウとそのナワバリ雄を同時に確認した場合には、太い灰色の実線でなわばりの境界を示し、それ以外の場合には太い灰色の破線でなわばりの境界を示す。J1～J8, I1, I2 はなわばり番号を示す (表1のなわばり番号に対応)。→は個体の移動を示す。☆は抱卵糞, □は砂浴び跡, ◇は卵殻があった場所を示す。

(中村 未発表)であった(ただし、植生や地形から推定したものは除く)。また、岩小屋沢岳周辺については、これまでに2回調査がおこなわれ、確認されたなわばり数は3(1980)と1(2006)(中村 未発表)であった。今回の結果はいずれの地域についてもこれらの結果と同程度のものであった。

現在、日本のライチョウは、主に標高の低い地域を生息域とする哺乳類や鳥類などの高山帯への侵入や捕食者の増加、地球温暖化などさまざまな問題をかかえている²⁾。実際、南アルプス北部の北岳から西農鳥岳までのように、1981年と2004年の調査結果の比較から、この23年間になわばり数が100から41へと約4割に減少し、個体群の絶滅が危惧される地域もある²⁾。今回、爺ヶ岳から岩小屋沢岳

については、なわばり数については過去の結果と同程度であったが、他の地域のように減少する可能性もあるため、今後も定期的に生息状況を把握する必要があると考えられる。

今回の調査にあたっては、長野県庁・生活環境部・自然保護課の江住和彦氏や寺島裕之氏、種池山荘・新越山荘の方々には手続きや宿泊や食事等についてさまざまな便宜をはかっていただいた。また、大町山岳博物館の清水博文氏や日本大学・生物資源科学部・野生動物学研究室の市川陽子氏、玉田明日美氏、永井理菜氏には現地での調査を手伝っていただいた。これらの方々から感謝申し上げます。

文 献

- 1) 羽田健三 (1985) 日本におけるライチョウの分布と生息個体数および保護の展望. 鳥 34: 84-85.
- 2) 中村浩志 (2007) ライチョウ *Lagopus mutus japonicus*. 日本鳥学会誌 56: 93-114.
- 3) 堀田昌伸 (1999) 日本におけるライチョウの生息個体数—これまでの調査から明らかになったこと—. 長野県自然保護研究所紀要 2: 1-12.
- 4) 富山雷鳥研究会(編) (2002) 北アルプスにおけるニホンライチョウの生態調査—生活史特性, 生息環境と保護・保全をめぐる問題—. 167pp, 富山県.
- 5) 大町山岳博物館(編) (1964) ライチョウの生活. 170pp, 第一法規, 東京.
- 6) 北原正宣・大川原千秋・内藤聡・清水善吉 (1980) 爺ヶ岳・鹿島槍ヶ岳におけるライチョウの生息状況について. 「特定鳥類ライチョウ保護事業報告書」(大町市(編)). pp. 1-13. 大町市.
- 7) 北原正宣・宮野典夫 (1992) 爺ヶ岳におけるライチョウの生息状況について. 「ライチョウ保護事業報告書」(大町市(編)). pp. 1-9. 大町市.
- 8) 北原正宣・宮野典夫・吉井亮一・肴倉孝明 (1998) 爺ヶ岳におけるライチョウのナワバリと繁殖. 「ライチョウ棲息状況に関する調査研究—爺ヶ岳地域における営巣地とその植生環境—」(大町市(編)) pp. 5-10. 大町市.
- 9) 中部森林管理局(編) (2003) 平成 12 ~ 15 年度ライチョウ調査. 78pp.
- 10) 中村浩志 (2006) 雷鳥が語りかけるもの. 山と溪谷社, 東京.
- 11) 環境省自然環境局生物多様性センター (2008) 生物多様性調査 種の多様性調査 (長野県) 報告書.

Breeding Status of Ptarmigan *Lagopus mutus* in Mt. Jigatake to Mt. Iwagoyazawadake

Masanobu HOTTA¹, Norio MIYANO² and Masaaki OZEKI¹

¹ Nagano Environmental Conservation Research Institute, Natural Environmental Division,
2054-120 Kitago Nagano, 381-0075 Japan

² Omachi Alpine Museum, 8056-1 Omachi Omachi City, 398-0002 Japan

Abstracts

Breeding status of the Ptarmigan *Lagopus mutus* was studied on Mt. Jigatake and Mt. Iwagoyazawadake, Northern Japan Alps, during the breeding season, 2007. Seven and two territories were established in Mt. Jigatake and Mt. Iwagoyazawadake, respectively. The numbers are the same as those in the previous studies.

Key words : Ptarmigan, *Lagopus mutus*, Mt. Jigatake, Mt. Iwagoyazawadake